

崔書勉先生と私『怪物』

小川 郷太郎

大いなる畏敬の念をもって申し上げるが、私にとって崔先生はやはり「怪物」である。しかし、この怪物は慈愛に満ち、信じられないほどの知性や洞察力を備え、しかも物凄い度胸を備えている。広い人脈を手のうちにしているのは、先生の豊かな人間性から来る。

先生に初めてお会いしたのはいつかは正確に覚えていないが、たぶん私がソウルの日本大使館勤務を終えて帰国した一九九〇年代の中ごろかと思う。ある会合でかねてご高名を耳にしていた先生にお目にかかったときに、肚の座って何とも言えない凄味のあるオーラを感じたが、お話を聞いていると私の知らないことや気付いていないことがどんどん出てくる。それらはいずれも私の胸にずんと響くような日韓関係の重要な事項であった。韓国勤務経験者として韓国が好きで日韓関係改善を真に願っている一人として自分の無知を思い知らされたが、先生のお話に引き込まれていった。何度かお目にかかり親しくさせていただくに従って、先生の尋常ならぬ偉大さを一層強く感じていった。数奇なご経歴を生き抜いて、日韓双方の政界、官界、知識人たちと広くて深い人間関係を築かれていることにも驚嘆した。

この大先生は、私のような若僧にも分け隔てなく、また女性にも優しく、ユーモアに溢れて人を包み込んで下さる。先生は人間関係をとてとても大事にされ、恩になった人には死後も遠近を問わず熱心にお墓参りを重ねる。そして、お酒の強さと言ったらまさに怪物的である。日本に来られるときは毎日のように国会図書館や外交史料館に入り浸って研究を重ねておられることも知り、先生の言動の凄さが理解できる思いがした。

一九九七年だったか、私が所属するある研究会の合宿で幹事役を仰せつかったとき、日韓関係の中の重要な点について日本ではあまり理解されていないと考えていた私は、日韓関係をテーマに取り上げることにして、まず崔先生に講師をお願いした。先生は快くお引き受け下さり、各省庁の役人を中心とする参加者にとっても新鮮で胸に響く話をしていただいた。夕食後の懇親会では自ずと先生を囲んで日韓問題に話が弾んだ。ここでも皆がますます韓国に関心を強くし、自ずと「皆で韓国に行ってみよう」ということになった。この旅行の幹事も私が指名を受けたので、ソウルでの日程作成には崔先生に全面的にお世話になった。韓国政府の高官や政治家、通常では会えない人との面会などが準備され、こうした方々との酒宴を含め、我々の韓国旅行は実に得難い経験となった。

私は今でもときどき韓国に行くが、ソウルで先生にお目にかかるのが楽しみである。先生の行きつけの「白松」でよく御馳走にあずかり貴重なお話を伺う。日本に來られて、お元気なお姿に接するのは私の大きな喜びである。

先日刊行された橋本明さんの名著『韓国研究の魁 崔書勉』を拝読して、この凄味があつて人に優しい碩学に一層畏敬の念が強まった。怪物のよういつまでも長生きされることを切に願わずにはいられない。

